

知ってますか

技術の

あれこれ

13

薩摩藩士と宝暦の治水



三浦 基弘

MIURA Motohiro

大東文化大学講師

木曾三川とは

美濃の国（現在の岐阜県）は、濃尾平野の最南端にあって木曾、長良、揖斐（明治初年までは伊尾）の三大川が緩やかに流れ、伊勢湾にそそいでいる（写真－1）。昔は三つの大きな川に、中小さまざまの支流が233程あって本流、支流が網の目のように入り乱れていたといわれている。『今昔物語』に長良川の洪水のことがふれられている。「今は昔、美濃國に因幡の河（筆者註 長良川）と云う大きな河あり。雨降て水出る時には、量りなく出る河なり。然ればその河のほとりに住む人は水出る時に登て居る料とて、家の天井を強く造て、板敷のように固めて置て、水出れば其の上に登て、物をもして食などしてぞ有ける」。この記録からみても、濃尾三川は、古くから土地の住民たちを悩ませてきたことがわかる。木曾川は延長1,025キロメー

ルで流量は毎秒16,000トン、長良川は706キロメートルで流量は毎秒8,000トン、揖斐川は573キロメートルで流量は毎秒6,800トンである。これらの川が絶え間なく土を運びつづけたのである。長良川はかつて羽島より上流で木曾川と合流していたので、運ばれた土砂の量は木曾川の方が圧倒的に多く、東高西低の地形がおのずと、つくりあげられてきたのである。

そして三川の平均水位は、河口から14キロ上流で、木曾川が一番高く6.7メートル、長良川が5.4メートル、揖斐川が4.3メートルの順に傾斜し、その差は2.4m程に及んでいる。木曾三川の流域では上流で大雨が降ると、まず揖斐川が出水し、ついで長良川、木曾川の順に最高水位になった。地元では古くから「四刻、八刻、十二刻」という言い伝えがあった。上流で降った雨が下流にたどり着くまでの時間を要する表現である。一刻は今の時間で言えば約30分なので、揖斐川は2時間、長良川は4時間、木曾川は6時間を経て下流まで水が押し寄せてくるということである。したがって美濃の国はひとたび雨が降ると、低い揖斐川に向かって平押しに流れ、田畑はもちろん家屋も流され、時には、大切な命まで失うこともあった。そして毎年、悲惨な状況が繰返され実に哀れなものであった。

1609（慶長14）年、尾張藩主徳川義直が、木曾川の左岸に犬山から河口に近い弥富まで御囲堤（図－1）を築いた。美濃の堤防（右岸）は、御囲堤より3尺低くされていたので、洪水が起きると尾張地区は水害からまぬがれるが、美濃側はいつも水害を被り、元禄13年から連年のように木曾川の堤防が切れ、さら



写真－1 木曾三川の航空写真

（写真提供 国土交通省 中部地方整備局 木曾川下流河川事務所）